
名探偵の法則

積み木 ウサ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵の法則

【Nコード】

N6480F

【作者名】

積み木 ウサ子

【あらすじ】

*この小説は「Holmes x Holmes」に加筆・修正を行い、書き直したものです。***** - 私立豊穰学園 - 大規模な教育施設。この学園で最近、奇妙な噂が流れ出した。『ナコさん。願いを叶えてくれるおまじない…』それと同時に次々と奇怪な事件が起こり始める。これを聞いた瑞之江一也、率いる生徒会は事件の真相を解き明かそうとするが…

00・The Beginning・発端―(前書き)

00・キーワード

・The Beginning＝発端

*このキーワードに沿って小説を書いています。

00・The Beginning - 発端 -

「私は・・・私は間違っていない！」

と、その少女は叫ぶように言った。

「間違っているのはあなたたちよ！」

そして、激しく体を震わせると、大きく息を吸い込みーそれからふと微笑んだ。

『さよなら・・・ナツミ・・・』

風の音でかき消されるほどの微かな声で呟いた。

悲壮と愛情のこもった美しい声で。

それから硝子が割れるように体を崩し、壊れた人形のように瞳を閉じた。

「畜生！」

と、彼は言った。「あいつのせいだ！」

少女は死んだのだ。

その口元から見て、麻薬か何か・・・毒性のある薬品を飲んだのだろう。

****Character****

登場人物が多数出てくるので、この場を借りて紹介させていただきます。(^^)

興味のない方はそのまま「01」にお進みください

<<生徒会>>

・瑞之江一也
みすのえかずや

高校二年生。生徒会長を務める。

一見、冷徹そうな印象を受けるが、実際はどこにでもいる普通の高校生。

面倒なことが嫌いなズボラな性格で、しばしば長篠に怒られる。俺様的な性格……？

綾乃・長篠とは幼なじみで、小等部からの付き合い。

・文無月綾乃
ひなしつきあせの

高校二年生。書記を務める。

のんびりとした性格だが、観察力に長ける。

欠点は優しすぎるところ。

瑞之江・長篠とは幼なじみで、小等部からの付き合い。

ながしの「つじ」
・長篠浩二

高校二年生。副会長を務める。
誰もが認める、生真面目な好青年。
そのため瑞之江とはしばしば対立するが、親友の仲。

瑞之江・綾乃とは幼なじみで、小等部からの付き合い。

こんだていりら「まな」
・近藤里奈

高校二年生。会計を務める。
はつきりとした性格の、姉御気質な少女。
気が強い。ため瑞之江とぶつかることがあるが、実際のところ仲は良い。
綾乃の親友。

豊穰学園には、高等部から編入してきた。

やさかよついち
・弥栄陽一

高校一年生。生徒監査を務める。
天然な生徒会のムードメーカー

<< 野球部 >>

おかざき「あゆむ」
・岡崎透

高校三年生。 野球部部长

・葛西矩継
かさいのりつぐ

高校三年生。 野球部副部长

*写真のことで生徒会に相談に来る。

<<写真部>>

・柳川憲人
やながわけんと

高校三年生。

*加奈子のことです生徒会に相談に来る。

・堀川加奈子
ほりかわかなこ

高校三年生。

・北野悠一、根尾風香
きたのゆういち ねおふうか

高校一年生。 (その他多数。)

<<美術部>>

・美葉彰浩
みはあきひろ

高校三年生。 綾乃の先輩、瑞之江とは因縁の仲。 美術部部长。

・清水美智子、永池香織
しみずみちこ ながいけかおり

高校二年生。 綾乃の友達。

<<演劇部>>

・提坂瑛太さげさかえいた

高校三年生。演劇部部长。（その他多数）

<<教師&その他>>

・豊穰春人ほうじょうはるひと

高校二年生。瑞之江のいとこ。

瑞之江は、両親の都合で春人の家に居候中。

・文無月圭太ふなつきけいた

中学三年生。豊穰学園中等部に通う。

綾乃の弟で、瑞之江とは犬猿の仲。長篠は部活の先輩。

・豊穰智治ほうじょうちせい（62）

豊穰学園の理事長。瑞之江、春人の祖父。

・時字馨ときあざかおる（29）

美術部顧問。美術担当。生徒会に協力。

・北島照光きたしまてるみつ（40）

生徒会顧問。日本史担当。

*その他多数!!

長い紹介を読んで頂き、ありがとうございました。（^o^）

登場人物は増え次第、随時更新していくのでよろしく願います。

それでは、本文をお楽しみください

01・Opening 始まりのゲンインナー（前書き）

01のキーワード

- ・Opening 始まり、事の発端

01・Opening 始まりのゲンインー

1

浅黒い肌の少年が広い額に汗を流し、つたつたと歩いて行く。
その堂々とした出で立ちは見るものに恐怖と威厳を与え、そしてどこか人懐っこい印象だ。

続いてその後ろを色黒の少年と似たような顔つきで、白い野球ユニフォームを着た少年と、制服を纏い（まとい）、狐のような顔をした少年がぴったりと歩幅を合わせ歩いて行く。

ここは私立豊穰学園。

小等部から大学院まで成る大規模な教育施設だ。

その学園の高等部の廊下を彼ら三人は歩いていた。

ガラッ。

先頭の少年が「生徒会室」と書かれた扉を開けた。
端正な装飾の施された重々しい扉だった。

2

「おい！生徒会長！」

押しの強そうな太い声で彼は言った。

「……………」
ドアを開けるときはノックと名乗り。そして返事を聞いてから中に入る。

小学校で習いませんでした？野球部部长　岡崎透おかざきとうさん。今は会議中
です。

それと生憎あいにく、僕は生徒会長という名前ではありません。
みずのえかずや瑞之江一也です。」

透き通った低い声で「生徒会長」と呼ばれた少年が答えた。
不機嫌そうに首を傾け、教室の真ん中に置かれた長机の一番端に、
20人程度の生徒を従えて座っている。

長めの黒髪に射るような大きな瞳。整った顔立ちの美しい少年だった。

「細かいことはどうでもいいんだ。今はそんな些細なことを言っている場合じゃない。

写真だ。」

「岡崎透」と呼ばれた少年はそこで言葉をぐいっと区切り、
砂ぼこりの付いたユニフォームから一枚の写真を取り出した。

「それは？」

瑞之江が怪訝そうに立ち上がった。それと同時に生徒会役員に軽く
声をかける。

すると4人の生徒が首を傾げながら席を立った。

「部員が部室で見つけたんだ。さっき俺のところを持ってきた。」

これはあなたに渡したほうがいいと思って葛西かさいとここに来たんだ。」

岡崎は苦々しそくに写真を見つめ、助けを求めるように瑞之江を見た。

瑞之江はそれを受けとると、同じく苦い顔をして写真を見つめた。

「……………「また」ですか……………」

その美しい顔を歪めながら彼は言った。

「先輩方には詳しくお話を伺いたいので、ここに残っていただきませう。」

そのあと日にちと時刻、発見者及びその場にいた生徒、教師名、それと写真を触った生徒を細かく調べて頂けますか？

それから各委員長の皆さん、今日は会議を中止します。

また後日「イタズラ」について詳しく説明をするので歯切れの悪い終わり方ですが、

各委員会嚴重注意を呼び掛けるということで、本日のところはお願いいたします。では、解散。」

瑞之江は迅速に指示を出し、その場にいた生徒はそれに従った。

あとには瑞之江を含む生徒会役員、岡崎を含む3人が残った。

02・KeyY告げられるカギー(前書き)

02のキーワード

・KeyY鍵

02・Key 告げられるカギ

『 ……ねえ…知ってる？ ……』

体育館の裏の裏、生徒に「抜け道」と呼ばれている通り道で私はA子に呼び止められた。

「え？」

部活の休憩時間に、コンビニに行こうと思っていたときのことだった。

「ねえ…知ってる？」

A子はにこにこしながら唇に人差し指を添えた。
その姿は子供がそつと秘密を明かすような、無邪気なものだった。

「何を？」

私が問いかけると、
微かに赤いマニキュアを付けた指が乳白色の肌から離れ私の胸を指差した。

「…ココロの願い…叶えるおまじない」

「…え？」

「ココロに秘めた願いが叶うの。秘密のおまじないなんだよ」

ふふとA子は笑って、愉しそうに話し出した。

「あのね、バレエ部の先輩から聞いたんだけどね、

豊穰学園にはナコさんっていう女の子の話があるんだって。

カミサマ…みたいなものかなあ。

でね、そのナコさんは選ばれた年に選ばれた生徒の願いを叶えてくれるんだって。

それで今年がその選ばれた年なんだって。ナコさんに願いを叶えてもらえるの。」

ここまで話してA子は面白いでしょ？と言いながら軽く笑った。

ちよつとしたネタとして話しているようだった。

きっと私がこのようなおまじない話が好きだから、話しに来たのだらう。

「それで？」

「うん。ナコさんに願いを叶えてもらうには条件が必要らしいの。

まずはねナコさんからコウシヨウを受け取らないといけないの。」

・コウシヨウ…？・

「コウシヨウってこれ？」

私が制服の胸元を指差すとA子はこくと頷いた。

「うん、それだよ。」

でもナコさんの学校の校章のワッペンを受け取らないといけないんだって。
それは誰にでもくれるわけじゃなくて、選ばれた生徒だけに渡されるんだって。
つまりワッペンが選ばれた証拠なの。」

ワッペンが

…選ばれた証拠…

信じられないけど、ワッペンが欲しいかも。

願い…叶えたい…

「あ、あと約束が6つあるの。」

「約束？」

A子はまたこくと頷いて、声を落とした。
そして詠うように言葉を紡ぎだした。

「ーひとつ 見せてはならぬ 知らぬ者には
ふたつ 告げてはならぬ 得たことを
みつつ 肩身離さず 持ち続けよ
よつつ 8日の子の刻 願いを込めて封をとぢよ
いつつ 9日の馬の刻 選ばれしものに封をとぢてそつとわ

たせ

むっつ そなたが選びし者に 儀式後 話を告げよ」

それは「いろはうた」のような謎めいたものだったが、
なんとなく意味を理解することができた。

「つまりワツペンを手に入れたのね？」

A子は照れながら頷き「私はあなたを選んだのよ」と言った。

「あなたも選ばれるかもしれない。そしたら叶えてね、ココロの願
い」

笑顔でそう言うのと体育館にゆっくりと戻って行った。

まるで重要な役目を果たしたような晴れ晴れしい姿で。

・・・ナコさんねえ・・・

本当にあるのだろうか？

そんな可笑しなこと。

もしも……

もしもあるとしたら…

私は……

「……………ごめん!」

「え?」

体育館に戻ったはずのA子が焦った顔をして、走って戻って来た。

「ごめん…わす…れてた…」

彼女にしては珍しく荒い呼吸をしていて、ぜえぜえ言いながら私を見つめた。

「ナコさん…には…もうひとつ話があって…約束…を守らなかった人には…
ナコさんの征伐が下るんだって…命を…持ってかれちゃう…らしいよ…?」

.....イノチヲモツテカレル.....

「...それって...」

私の体が小刻みに震える。手に微かに冷たい汗をかいていた。

「そう.....死ぬ.....ってこと」

息を整えたA子が冷めた瞳をして呟いた。

03・Rumor少女のカゲイ(前書き)

03のキーワード

・03・Rumor=噂

03・Rumor少女のカゲ

3

「……さて……」

瑞之江が静かになった教室をゆっくりと見回した。
それから残った面々の顔を眺める。

「これから今校内で起きている陰湿なイタズラについて、
岡崎先輩、葛西先輩、それから柳川先輩に簡単に説明します。
先輩方にこのイタズラについて理解して頂かない限り、
生徒会でこの写真について動くことは不可能です。ですから、きち
んと聞いて頂きたい。」

23

そこで瑞之江は話を句切り、三人の瞳を鋭い眼差しで睨み付けた。
まるで獲物を狙う野獣のように。

「いいですね？」

暗黙の了解……

三人は深く頷いた。

「では、あちらの長机に座ってください。
それと……柳川先輩、先輩はどのような経緯でここに来れたのですか

「？」

「柳川」と呼ばれた狐顔の少年はビクツと背筋を振るわせると、青い顔をして瑞之江を見つめた。

それから絞り出すような細かい声でぽつりと呟いた。

「…かつ…かなこを…海南子を助けてほしい！！」

それからキツと顔をあげ、瑞之江の襟元をぐつと掴んだ。

「お願いだっ！海南子を助けてくれ！」

背の高い柳川に首を掴まれ、さすがの瑞之江も唾然とし、

代わりに副会長の長篠ながしの 紘治こうじが柳川を諭した。

背が高く、真っ直ぐな黒髪をベリーショートに切り上げた彼は、どこからどう見ても真面目そうな少年だった。

副会長というよりは生徒会長を務めていそうだ。

「柳川先輩、落ち着いてください。」

瑞之江を掴んだって俺たちはあなたに何もしてあげられませんよ」

長篠は諭しても尚、瑞之江の襟元をつかみ続ける柳川の手をそつと掴んだ。

柳川はびつくと肩を上げると、降参したようにだらりと手を下ろした。

「何があつたんですか？

ゆっくりでいいので、すべて話してください。話を聞けばお役にたてると思います。」

続いて書記の文無月綾乃ふなづき あやのがにこつと笑い、柳川を長机に座らせた。自分もその隣に腰かけて探るように彼を見つめた。茶色がかったセミロングの髪を垂らした、おだやかな感じの少女だ。それほど身長は高くないが、人を引きつける独特の雰囲気がある。彼女の周りはいつても人で溢れていそうだ。

「…たんだ…」

「え？」

唇を血が滲むほど強く噛みしめ、震える拳を机に携えながら、柳川は押し殺した声で話し出した。その瞳は怒りで満ち溢れ何か強い光を宿していた。

「来たんだ…海南子のところに…ワッペンが…」

「ワッペン…？」

綾乃の斜め後ろに立っていた会計の近藤里奈ことばりなが訝しげに眉をひそめた。

背が高くすらつとした彼女は長めのストレートのよく似合う、大人びた感じの少女だ。

ちらほらと見える筋肉質な手足が彼女の洗練されたスタイルを見事に際立たせている。

里奈は綾乃と顔を見合せ、記憶を手繰りよせるように瞳を閉じた。二人の顔にはなぜか恐怖が浮かび、凍りついたような顔をしていた。状況を掴めていない男子陣はきよとんとしながら椅子に座った。

「先輩、それは噂になっている…ナコさん…ですか？」

戸惑いを浮かべた声で綾乃が思いきったように柳川に尋ねた。
柳川は溜め息をつくようにな声で「ああ…」と頷いた。

4

「ナコさん。って言うのはね、女子の中で流行ってるおまじないみたいなものなの」

瑞之江に促されて里奈と綾乃が話し出した。

「いつから流行りだしたのかは解らないけれど、たぶん女子の七割は知っているはず。」

特に高等部、中等部の女子は知らない方が可笑しいと思う。」

里奈は宙に瞳を泳がせ、それから綾乃に軽く目配せをした。綾乃が先を進める。

「ナコさんは豊穰学園の生徒で学校が大好きな女の子なんだって。でも体が弱くて保健室によく通っていて、友達やクラスメイト、先生にお世話になってたんだって。でね、ナコさんはみんなに助けてもらった恩を返すように、選ばれた年に選ばれた生徒の願いを叶えてくれるんだって。」

「つまりコツクリさんみたいなものか…？」

瑞之江が腕を組みながら言った。

「…うーん…どうなんだろう？」

なんかコツクリさんって言うより女子の神様…みたいに言ってたけど。」

「神様？」

「うん。誰に聞いてもそうゆうの。『願いを叶えてくれる、神様なんだよ』って。」

あと、ナコさんの生死は解らないみたい」

「ん？」

「話さないの、誰も。ナコさんが生存者なのか、死者なのか。」

ほら、こうゆう話には必ず『事故死した』とか『学校を恨んでいた』とか、死を表す言葉がつくでしょう？」

ナコさんにはないのそうゆうお決まりの文句が。

最初はあたしがたまたま聞いてないだけかなって思ったんだけど、違うみたい。

誰も話さないから。」

里奈も頷いた。

「先輩が『それは禁句だよ？』って言った」

瑞之江が頭を捻る。

長篠は考え込み、柳川は苦々しそうに顔を歪め、岡崎と葛西は面白そうに聞いていた。

「つまりナコさんは…生きていて俺らと同じように学園で生活しているかもしれない…？」

驚いた顔で長篠が言った。

「うん。コージの言う通り。誰かが…誰か生徒が何か目的を持ってやっているのかも。」

「生徒以外。って可能性もあるわ」

里奈が呟いた。

「一部ではナコさんは『先生で…』と話されているらしいから。」

全員が啞然とした。

綾乃も初めて聞くようで、驚いていた。

特定することのできない霧のように儚く、闇のように深い人間がいる…

学園で何か工作をしている可能性がある…恐怖を与えるには十分な種だった。

「特定不可能…ってやつか。それはちょっとヤバイかもな」

瑞之江が静かに沈黙を破った。

「ナコさんが何をしてるか知らねえが広まるのはヤバイ。集団の中じゃなにか起こるか解らねえし、悪意を持った人間がやっていることなら、何か危険に巻き込まれる可能性もある。」

「どしするの？」

綾乃が不安げに呟いた。

「調べるぞ。学校で起きているイタズラと絡めてな」

04・Chitchat・・・活動カイシ?・・・(前書き)

キーワード Chitchat・・・無駄話

「調べるって・・・どうするの?」

綾乃が腕を組みながら瑞之江に聞いた。だした。

「簡単なことさ。ナコさんと、写真について資料を集める。」

瑞之江は簡潔に答えた。

その声は自信に溢れ、怯むことなく堂々としていた。

だが、それを聞いた綾乃を含む一同は呆れたように彼を見つめた。

「まさかインターネットや、図書館で調べるつもり?

どう考えても今回の件に関する資料を入手できるとは思えないけど。」

里奈が苦笑しながら、皮肉たっぷりの口調で彼を問い詰める。

彼女の瞳には雀の涙ほどの軽蔑が、ちらほらと影を潜めていた。

「確かにそれは不可能だな。」

今回は普段の行事や、生徒のトラブルとは全く型が違^{かた}う。

つまり一般論で考えても何の糸口も掴めないわけだ。

ましてや資料や情報を収集するなんてある意味じゃ不可能に近い。だから俺は裏手に考えてみた。

警察がやるような、ちよつと複雑なことをな。」

「まさか・・・。」聞き込み調査』とか言っなよ・・・。」

先程まで背筋をしつかりと伸ばし、ゆったりと椅子に座っていた長篠が、ぐったりと肩を下ろし絶望的な声を上げた。

「さすが警視監の息子の、コージくん。

鋭いところを突いてくるね。」

瑞之江はニヤツと笑うと、ゆっくりと立ち上がった。

それから彼の直線状にあるホワイトボードに向かって、足早に歩いていく。

「長篠が言った通り、今回は聞き込み調査が最良の策だと思います。

」

歩きながらどこか愉しそうに彼は話し出した。

「表が通じないなら、裏で使うしかない。

白が駄目なら黒を取るしかない。

つまり、普段使うことのない体力をフルに使って調べるしかないんですよ」

ホワイトボードにたどり着いた瑞之江は、手近にあった黒インキを手を取った。

そして、すらすらと細かな文字をホワイトボードに綴っていく。

今までぼーっと考え込んでいた一同は、授業を受けるときのようにじっくりとホワイトボードを読み始めた。

その間にも瑞之江は休むことなく、右手を動かし続ける。

多少、文字が歪んでも彼は気にすることなく書き続けた。

「生の情報を手に入れようってことですねっ」

ホワイトボードの一番手前に座り、熱心に文字を読み進めていた弥さか栄陽介が呟いた。

彼の頬は微かに上気し、瞳はきらきらと輝きながら、興味深そうに文字を追っていく。

ふわふわとしたくせっ毛が彼が動くたびに揺れ動く。

まだどこかあどけなく、幼さの残る少年はいち早くホワイトボードを読み終えようと、必死になっていた。

「その通り。つか、弥栄、いつからここにいたんだ？」

文字を羅列している瑞之江がふと手を止めて、不思議そうに横目で彼を見た。

「酷いですよー、先輩。

初めからいましたよ。

葛西先輩達が生徒会室に来たときから。

昨日、先輩に頼まれた総会の資料をつくっていました。」

弥栄はすつと立ち上がり、教室の南東に置かれた古ぼけたパソコンを指差し、

続いてプリントの束を持ち上げた。

「確かにはじっこにいたから、気づかないのはしょうがないんですけど、

僕を幽霊部員みたいに扱わないでくださいよー。今まで委員会をサボったことはありませんよ?」

少々寂しそうな顔をして、弥栄はまた椅子に座り直した。

「悪い。この教室の人数を数えるのは難しいからさ……」

「誰かさんのお陰でね……」

綾乃と里奈が冷ややかに、声を揃えた。

この生徒会室は50人ほどが裕に入る、多目的ホールのようなつくりをしている。

そこに模造紙や使い古されたポスターやゴミの山、電化製品を含めればパソコンから電子レンジまで、所狭しと置かれている。

そのうえきちんと整理しておけばいいものを、厄介ごとが嫌いな役員が乱雑にそれらの品々を積み上げるように置いたものだから、教室の隅々を見渡すことが非常に困難だ。

それゆえ、教室にいる人間の数を数えるのも困難になってしまったわけだ。

ましてや弥栄のように、1人で仕事をしていれば気づく者は少ないだろう。

綾乃いわく、

「この教室に殺人者がいても、きっと誰も気づかないだろうなあ」
だそうだ。

（ちなみに彼女と里奈が度々そうじをしているが、一部の怠慢な役員のお陰で、いつも三日もしないうちに汚い生徒会室に戻ってしま
うらしい。）

つまりこの生徒会室という所は壊滅的に汚れていて、誰がいるのか

も分からない、言わば魔窟のような場所なのだ。

「その話は置いて、先を進めるよ、一也。前もって言っとくけど、俺は絶対に聞き込みはパスだからな」

「はいはい、長篠くんは我がままを突き通すようなので、みなさん深く理解してあげてくださいーいっ。」

副会長がこんなことも出来ないなんて、うちの学校大丈夫なんですかねえ。」

仏頂面の長篠に瑞之江が大声で冷やかしを浴びせる。口元に浮かべた意地悪い微笑みが、まるで悪魔のようだった。

長篠はそれを冷たく聞き流し、怒りに震える両手首をぎゅっと力強く握り、黙って瑞之江を睨み付けた。

残った生徒会役員はその状況をため息をつきながら眺め、岡崎達は狐につままれたような顔をして、息もつかずに静かに見守っていた。

「…また俺に、恥をかかせたいわけだ？」

「いや、別に。」

一言もそんなこと、言っていないぜ？

ただ『聞き込み』をやるって言ったただけだ」

「どう考えてもそれは俺に対する嫌みだよな…。小二の時のことを、忘れたわけじゃないだろ？」

「小二…？」

あらあら…長篠くんは未だにそんな過去のことを引きずっているん

ですか？

僕はとつくに乗り越えたと思いましたが？」

瑞之江は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「乗り越えた？

俺が何を乗り越えるわけ？あれは一也が悪いんだろ」

長篠はその挑発を冷たく聞き流し、冷静に対処した。おだやかな微笑みさえ浮かべている。

だが、瑞之江はそんな長篠を面白そうに眺め、せせら笑った。なぜならいくら大人びた態度を取っても眉間に深く皺が刻まれ、誰がどう見ても怒りに燃え上がっているのが明確だったからだ。

「あつそう…じゃあ俺が…」

「あの、先輩…」

激しく睨み合う二人を宥めようとしたのか、弥栄がぼそりと口を挟んだ。

「聞き込みのことで討論をするのは自由だと思っんですけど、今はもう四時なんですよ…」。

このままずると時間を過ぎても、今日は何も出来ずに終わっちゃいますよ…？

ここに集まった意味がなくなってしまっし、岡崎先輩たちにも迷惑がかかると思います…」

彼はそれらのことを一気に捲し立てると、小さな背中をもっと小さく丸めて気まずそうに下を向いた。

瑞之江と長篠はあんぐりと口を開け、下を向いた気弱な後輩を見つめた。

普段はつきりと物を言わない弥栄が、珍しくはつきりと注意したものだから、二人とも怒りを忘れて驚いてしまったのだ。

さらに追い討ちをかけるように里菜が口を挟んだものだから、二人は黙って頷き先に進むことしか出来なくなってしまった。

里菜が一度、り出すと誰も手をつけられなくなってしまっただ。

「ええ…失礼しました…

話を元に戻しましょう…

聞き込みをどのように行うか、とのことですが、僕は二手に別れて行うのが最良だと思います」

「どっやってわかるんだ？」

今まで押し黙っていた岡崎が、面白そうに問いかけた。

「単純に写真担当と、ナコさん担当にわけるともりです。

今のところ両問題に繋がりはあるとは思えませんから」

「なるほど。

つまり俺らの写真についても、柳川の海南子？の問題についても一気に取り組むってことだな」

「ええ」

「ちなみに、それはそつちがやるんだろ？」

「はい」

「それなら俺らは用なしだ。

部活に戻らせてもらう」

岡崎は笑顔で頷きながら立ち上がる。

「そうするか、大会前だし、余裕ないからな」

葛西も埃がついたユニフォームを叩くと、ドアに向かって歩いて行くこととした。

「駄目です」

瑞之江が鋭い声で二人を呼び止める。

「始めに言っただでしょう？」

先輩方に学校で起きているイタズラについて、理解して頂かない限りこちらでは何も出来ない」と。

無駄に時間を割いたことは謝ります。

しかし、部活に戻ることは許しません。

話を最後まできちんと聞いて頂きましようか…

見てれば先輩方はるくにホワイトボードを読んでいないじゃありませんか。

それでは困ります」

瑞之江は暗唱するように、一気にそれらを話し終えると、鈍く輝く瞳をキラつかせながら立ち上がった二人の肩を掴み、椅子に座らせた。

「話しは全て聞きましたよね？」

何か文句があるならどうぞ、はっきりと述べてください」

独裁政治…

岡崎と葛西の頭にぼんやりと、そんな言葉が浮かんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6480f/>

名探偵の法則

2010年10月9日19時01分発行